

成城大学 2025 年度 全学部統一選抜（S 方式）
2 月 2 日：国語

■解答番号 正答

1	2
2	4
3	1
4	1
5	3
6	4
7	3
8	2
9	3
1 0	1
1 1	4
1 2	2
1 3	3
1 4	1
1 5	4
1 6	3
1 7	2
1 8	1
1 9	3
2 0	4
2 1	4
2 2	3
2 3	3
2 4	2
2 5	1
2 6	2
2 7	2
2 8	3
2 9	4
3 0	1
3 1	4
3 2	2
3 3	4
3 4	3
3 5	4
3 6	2
3 7	1
3 8	1
3 9	1
4 0	4
4 1	1
4 2	2
4 3	4

■出題意図

〔一〕

大学入試の現代文は、議論の二分法を理解出来ているかどうかを問う問題が多い。本問題の場合、欧米的な「主体」「客体」の峻別を前提としながらも、その二分法で説明しきれぬ、東洋的な認識のしかたである西田幾多郎の「純粹経験」なる概念を、いかに著者佐伯の行論に寄り添って理解したかをみており、これもまた受験生の論理的思考を試す意図がある。また「純粹経験」と同様の認識が東洋のみならず、西洋思想の根底に存在したにもかかわらず、合理主義や近代主義の中で隠蔽されてしまったという指摘を、著者独自の文明史論的把握として理解できているか、これも小問を通じてはかっている。

〔二〕

見えないものを見る、あるいは聞くというこの文章の主題にしたがって、前半は唐招提寺や須磨寺における芭蕉の想像的記述を例示し、後半、その芭蕉が有名な発句「枯枝に鳥のとまりけり秋の暮」において想定する鳥が、27羽から1羽に変化した過程を理解できたかどうかを試みる問題である。とくに後半は、著者の記述自体が1羽の説明から27羽に及びながら、芭蕉自身の心境はその逆の変転を辿っているという行論を読解できているかどうかを問う。一見混雑した文脈も、丁寧に読み込めば確実に正答に結び付くであろう。その合間に簡単な文学史や古典の修辞技巧、古典文法の理解をためす小問も織り込んでい